

フィリピン

フィリピン大学ディリマン校

(1) 総合的な感想

今回の留学において得ることのできた経験を留学前と留学中に分けて述べる。

まず、私は留学をするにあたり、準備期間において自己成長につながる経験ができた。大学入学以前から留学を希望し、3つの目標を設定した。1. 留学前に卒業のために必要な単位をすべて、高い水準でとり終えること。2. 交換留学をかなえるために英検準一級に合格すること。3. 自分で貯金したお金のみで留学することである。入学してから2年半をかけ、すべての目標を達成して希望通りの留学ができた。目標達成のために行った試行錯誤や努力は確実に今後の人生で役に立つ経験になったと同時に、自信を持つきっかけになったと自負している。

また、留学中には新たな発見や学びにあふれた有意義な時間を過ごすことができた。フィリピンで生活するなかで、貧富の差や、生活水準の低い人々の生活を知り、フィリピンの抱える問題に関心を抱いて自分なりに考察したり、経済や政治について情報を収集したりした。人々の現実を肌で知り、そこから得た学びは貴重なものになった。また、フィリピンで出会った人々の性格や人柄を知り、座学ではわからないフィリピンの魅力を発見できたことも自身にとって有意義だった。

(2) 派遣先大学について

フィリピン大学ディリマン校はフィリピンでトップの大学であり、講義の内容や生徒のレベルは総じて高い。教授、生徒ともに親切な人が多く、困ったことは声を挙げればすぐに手を差し伸べてくれるため、非常に助けられた。勉強熱心なクラスメートに感化され、自身も学びを中心とした生活を送ることができた。授業内容についていくことや課題をこなすことが難しく、大変なことや迷惑をかけてしまったことも多々あったが、人のやさしさに感謝しつつ、学ぶ事に一生懸命になることができ、充実した毎日を送ることができた。

(3) 生活面について

日本の生活とは異なる部分が多くあり、最初は戸惑うことが多かった。そのうちのいくつかを具体的に列挙する。

まず、寮の生活は少し不便である。シャワーは冷水しか出ず、冷蔵庫は各階（約30人）に1個ずつ、電子レンジは1棟に2つしかない。エアコンはなく、トイレにペーパーを流すことはできない。加えて、使用できる電子機器が限られており、ドライヤーやヘアアイロン、電気ポットは使用禁止である。私もはじめは不快に感じたり、戸惑ったりしたが、5か月も過ごすうちに慣れてきて快適に過ごすことができるようになった。不便なことも多い寮生活だが、多くの人と常につながる環境に身を置くことがで

きるなど貴重で楽しい毎日を送ることができるので、寮生活を選択してよかったと思っている。

次に、キャンパスの外は留意点が多い。治安が悪い場所ではすりがいるし、ストリートチルドレンやホームレス、物売りに声をかけられることも多い。排気ガスによる空気汚染や食べ物や飲み物による食あたり、感染症の流行なども多々おこる。しかしどれも、周囲の人々の行動から学ぶ、情報共有、助け合い、自分で気を付けるなど対策をすることで被害を受けないもしくは最小限にすることができる。苦労もあるが、私自身はこれらの経験から海外に居住することへのハードルが下がり、より一層人生の選択肢が増えたように感じるので、良い経験になったと思う。

(4) その他（ボランティア・旅行等）

ボランティアに参加した友人もたくさんいたので、アンテナを高く張り広い友好関係を築くことでボランティアに参加できる機会は多いと感じる。ボランティアにも多様な種類があるが、一緒に留学した友人には、途上国開発や途上国支援などに興味をもっている子が多かったため、それらの分野に関連したボランティアが多かったように思う。

留学中、旅行することをお勧めしたい。ビザ取得のために長い時間がかかる関係で国外移動には制限があるが、フィリピンは多数の島からなる島国で、各々に独特で興味

深い文化が根付いているので、国内旅行でも多文化に触れ、学ぶことができる。同時に多文化共生のための工夫を自然と知ることができるのも魅力だと感じている。

(5)後輩へのアドバイス等

フィリピンはたしかに日本での生活や環境とは違うことが多くあり、渡航前は心配や不安が多い留学先かもしれない。私自身も不安が大きかったし、周囲から心配してもらうことも多々あった。しかし、留学して生活してみると、日本とは違う価値観や国民性に触れ、知れば知るほど魅力的な国だと感じるようになった。

日本とのギャップや先入観にとらわれず、積極的にコミュニケーションをとり、どんな状況もポジティブに考えることで、より一層楽しく満足度の高い留学になるように感じている。

↓モール（フィリピンでの滞在中、モールで過ごす時間がとても多かった。）



↓UPD キャンパス



フィリピン大学
交換留学報告書

静岡県立大学 国際関係学部



フィリピン大学ディリマン校に交換留学生として、2023年9月から2024年1月末まで約5か月間滞在したという経験は私の人生において忘れられない思い出となった。これまでに何度か海外に渡航した経験はあったが、留学生として海外に5か月間もの間生活するのは初めてであり、自身の人生において大きな経験となった。

初めに、フィリピン大学での学生生活についてお話ししたい。フィリピン大学ディリマン校は通称 UPD と呼ばれる大学で学生のレベルが高く、他の大学から編入試験を受けて編入してきたという学生の多さに驚いた。私はフィリピンの観光学の授業2つと英語の授業、スピーキングの授業の4つの授業をとっていた。この大学は一つの科目が週に2回あるため授業のスピードが速く、学生自身が自主的に学習することが求められた。特に、観光学とスピーキングの授業は日本人が一人であったため、毎回の授業についていくのに必死であった。しかしながら、学生たちはフレンドリーで優しい方ばかりであった。私が授業で分からないことを尋ねるとなんでも快く教えてくれた。特に観光学の授業で仲良くなったフィリピンの学生は、放課後に一緒に遊びに行ったり、たわいもない話をしたり、私が留学生であるからと言うのではなく本当の友達のように接してくれたことが何よりもうれしかった。フィリピンの学生は日本に関心を持ってくれる方も多く、みんなオープンでフレンドリーな印象を受けた。

次に寮生活について話したい。私は大学のキャンパス内にあるアカシア寮という寮に滞

在した。アカシア寮は三人一部屋で、多くの留学生がこの寮に滞在していた。渡航前は寮のシャワーにはお湯が出ない、エアコンがない、など日本との生活環境の違いに抵抗を感じることも多かったが、寮の仲間と共同生活をするうちに次第に慣れ、すべて自分でやらなければいけないという環境の中で自身を身体的にも精神的にも大きく成長させることができた。空いた時間や寝る前にルームメイトや他の留学生とフィリピンでの生活や将来について語り合った経験は私の価値観を大きく広げてくれた。

最後に学校と寮以外の場面で、フィリピンで感じたことや経験について話したい。私がフィリピンで衝撃をうけたのは深刻な交通渋滞と貧富の差である。フィリピンの交通機関は主にジプニー、バス、車、タクシー（GRAB）、電車、バイクなどがあるが、電車は都市の中心部しか発達しておらず、ほとんどが道路を利用した交通機関であったため交通渋滞が毎日のように起こりいつ着くか分からないという場合がほとんどであった。また、少し大学の外を出て街に出るとゴミ山を漁って食べ物を探すゴミ拾い、ペットボトルを持ってコインを求めるストリートチルドレン、小さい子供を抱えながら路上で物売りをする母親、など一日一日を生きるのに精一杯という人々の現実を目にして衝撃を受けた。その一方で私たちがうらやましく感じるほどの豪邸で暮らし、お手伝いさんや運転手を住み込みで雇っているほどの富裕層が存在するという現実にも驚かされた。日本に見られるようなビル街とスラム街が隣り合わせだった。

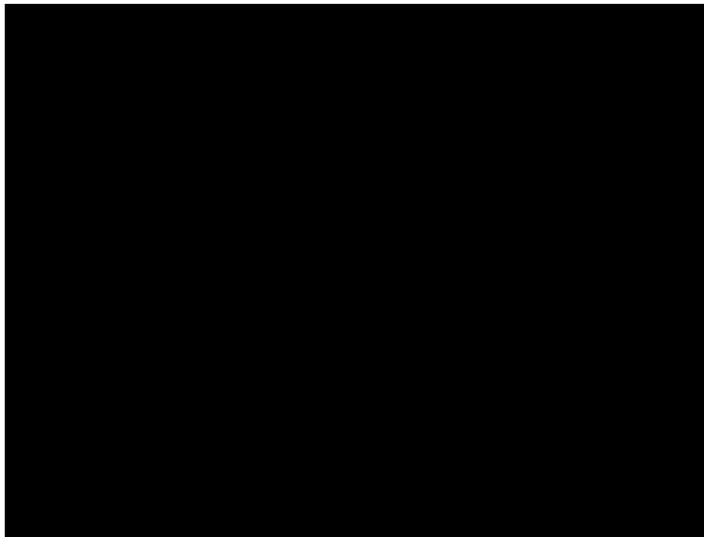
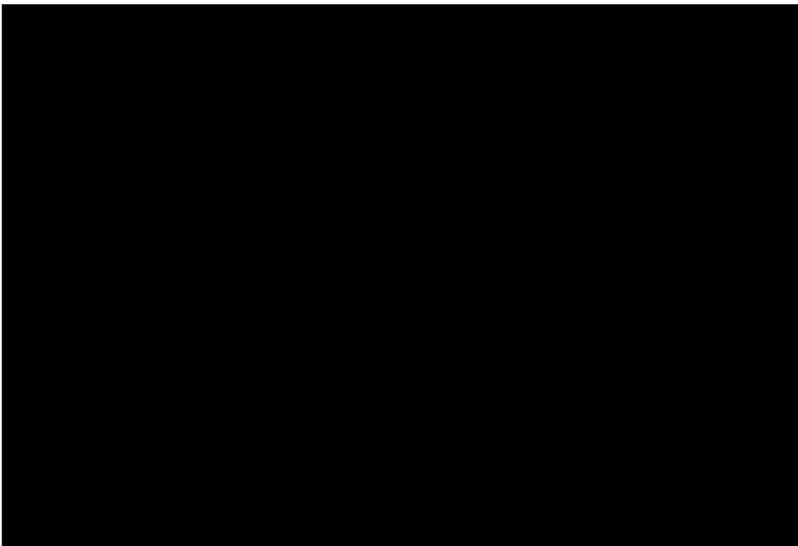
フィリピンでの5か月間は、長いように見えてあっという間であった。日本との生活環

境の違いや授業進度のはやさにギャップを感じ、少し辛い時期もあったがそれ以上に多くの素晴らしい出会いに恵まれ、様々なことを経験し、自分自身の視野を大きく広げることができた。また、自ら積極的に行動を起こすことの大切さを学んだ。最初は人からの誘いでもそこに参加することで何かしらの学びや新たな出会いがある。フィリピンの田舎に向くフィールドワークやボランティア活動などの課外活動では授業では得られない経験を沢山することができた。留学を通して今までは無理かもしれないと思っていたことに対しても、やってみれば意外にもできるということに気づかされ、少しマイナスなことがあったとしても「なんとかなる」とポジティブに捉えることができるようになった。

最後にこの留学を実現してくださった大学、先生方、家族、友人、そして現地で出会ったすべての方々に心から感謝したい。この留学で培った力や経験を活かし、これからも様々なことに挑戦していきたい。

フィリピン大学 交換留学報告書

静岡県立大学国際関係学部国際関係学科3年



大学について

私は1学期間(5か月)、首都マニラに位置するフィリピン大学ディリマン校に交換留学しました。大学では地域開発学部の授業やフィリピン語、英語の授業を履修しました。フィリピン語は現地へ行ってから勉強し始めましたが、先生の教え方がとても分かりやすく、短期間で基礎が身についたと実感しました。講義は英語で進められますが、フィリピン人生徒同士の会話や、現地の人にはフィリピン語を話す割合が高いです。特に、お店の人は簡単な英語しか通じないため、フィリピン語を学んでおいた方がコミュニケーションを取りやすいでしょう。外国人が現地語を話すと喜ばれます。私はゼミで開発人類学を専攻しているため、地域開発学部の授業が最も興味深かったです。ケーススタディで、国内の様々な場所での開発の事例を扱った文献を読んだり、フィールドワーク調査に2回行きました。どれもグループごとに行うため、友達と仲良くなれました。しかし、言語の壁にぶつかりました。インタビューを行う住民の人たちはお年寄りも多く、英語が話せないからです。私はフィリピン語を授業で履修していたとはいえ、簡単な会話程度です。聞きたいことや知りたいことは沢山あるのに、UPの友達を介してしか理解することが出来ませんでした。現地の人々の暮らしを目で見ただけでも貴重な体験ですが、会話をすることができたらより学びが深まると思います。フィリピン大学は国内で4本の指に入る、とても優秀な大学です。音楽から医学まで多種多様な専攻の人が集まり、学内はまるでアメリカの学園ドラマのように人が多く、サークルも盛んです。県大では味わえないキャンパスライフを目にするでしょう。提出される論文のレベルは高いですし、授業中に発言する生徒も多い、学生運動もあり、人の目を気にするという文化は全くないです。しかし、萎縮する必要がありません。英語力がとても高いとは言えない私でさえも、ついていくことは可能です。分からないことはすぐに隣の人に聞き、提出物の期限をきちんと守れば単位はとれるでしょう。

生活について

日本よりも生き生きしている雰囲気、明るいパワーは、キャンパス内だけではなく、貧困地域でより感じました。フィリピンに住んでみて、国内の様々な場所に行き、多くの人と出会ったことで、一番感じたのは貧富の差です。マカティと呼ばれるビジネスエリアは日本人や韓国人などの外国人が多く、東京のように高層ビルが並びます。道にゴミは落ちておらず、野良犬も、ジプニー（フィリピン人の足、乗り合いバス）もなく、車ばかりです。一方で、フィリピン再貧困地域と言われるトンド地区は、子供や人が密集しており、ゴミを漁り、そこからお金になるものを見つけて売ること生活している人がとても多いです。学校には校庭がなく、屋上のコンクリートエリアで野球の練習をしている子供たちに会いました。奨学金なしで大学に行くことは不可能なので、スポーツ推薦を狙って頑張っていました。その屋上からはマカティの高い建物が見えて、少しつらい気持ちになりました。ここには書ききれないほど、多くの現実に触れ、思うところがありました。フィリピンへ行かなければ絶対に分かることはなかったでしょう。ゼミや授業の座学だけでなく、実際に目で見て、感じたこの貴重な経験を忘れないようにしたいです。

最後に、この留学は思っていた通りではないことも沢山ありました。例えば、寮に行ったら、日本人が約30人居て、ルームメイトも日本人、どの授業にも日本人が5人くらいいる。英語が劇的に伸びたかと言われれば、そうではないと思います。しかし、日本各地から目的をもって来た仲間たちに、とても刺激を貰ったことも事実です。将来を語り合い、共に励まし合い、充実した留学生活が送れました。もし、フィリピンに行くこと、新興国に留学することに不安を持っている人がいたら、重く考えないで欲しいと言いたいです。日本では考えられないような生活をしている人達に出会います。生きているだけで十分素晴らしいですし、若いうちにこのようなサバイバル経験をするのも悪くないと私は思います。排気ガスと不健康な食べ物により、寿命は半年くらい縮むと思いますが、それ以上に

価値があります。日本の良いところも嫌なところも分かってきます。ぜひぜひ、好奇心を持って、挑戦してみてください。留学はどの国でも絶対に行った方が良いです。

フィリピン大学交換留学に関わって頂いた全ての皆様に感謝致します。ありがとうございました。